

石川 (イヒチャヤー)

はじめに

八月から九月にかけて公民館講座「ふるさと再発見(地名のはなし)」を担当した。市民の地名への関心や質疑のレベルは高く担当者としても大変勉強になった。地名は歴史学は当然、地質学、言語学、民俗学、人類学などにも及び素人の趣味程度の知識では手に負えないことを改めて実感した。

講座のサブテーマは「地名のはなし」だが、話題は広がり「ヌギバイ」の話から「ヒンギバイ、ソーヌギバイ、シカバイ、ジューチリバイ、シニバイ、ヌチチリバイ、・・」や「獅子(シシ・シイーシ)」と「シーサー」はどう違うか等、休憩時間なしの熱心さでこちらが「苦しい」の連続であった。しかし顔なじみの市民のみならずと親しく語り合うことは楽しくまさに「ふるさと再発見」であった。これを機会に一人でも多くの市民が地名への関心と理解を深め、地名を大切にする意識が高まればこの講座の成果につながる。

石川の変遷

石川は間切時代には越來間切、美里間切、市町村制下では美里村の行政下にあったが、沖縄戦終結直後米軍政府の諮問機関として「沖縄諮詢会」が置かれ、昭和二十年九月美里村より分離し石川市が誕生した。

市となったのは、戦争時に本島中南部方面から多くの難民が収容され人口が三万人余りとなっていた。石川は戦

後沖縄の政治、経済・文化の中心地、初等教育発祥の地として沖縄の復興発展に大きな役割を果たした。そして平成十七年四月一日に二市二町が合併して「うるま市」となった。

石川の語源と意味

石川地名は小字を含めると、県内外に多く文に分布している。石川県の石川や福島県の石川は「石の多い川」の意味との説がある。「沖繩地名考」(宮城真治)はかつて本部にあった石嘉波(検地帳石川)は、石原の義であろうとしている。本市の石川市史は、「石川の言語はイヒチャヤーでイーフンチャヤーから転じてイヒチャヤーになった」としている。イーフというの川が運んできた土砂が堆積してできた土地のことである。

果たして石川の語源は「イーフンチャヤー」だろうか。石川の海岸よりの所は金武湾の波が運んできた砂が堆積してできたよりあげの地である。このような海岸地名としてはカネク(ハニク)、ヨネなどの地名が多い。石川市史の「石川ノ古形図」を見ると伊保崎、白浜、兼久の海岸地名があるが伊保先崎は石川川河口にあり、その位置からして石川の発祥地と言え難い。またイーフンチャヤーからイシカワに転じる過程を説明することは難しい。さらにもしいイーフンチャヤーならイーフ自体が土のことなので敢えて「ンチャ」という必要はなく、「イーフ(伊保)」でもよい筈である。琉球国由来紀(二七三一年)に石川之殿、琉球国旧記(一七三二年)に石川村が見える。石川の前田原にある

石川井について石川市史は「昔石川アタイ付近に在住する人民が、・・・。或いは石川の名称もこれによるかと思われる。」とも記している。

石川は集落発祥の地といわれる「石川アタイ」からきた地名であり、イシカワ↓イヒキヤー↓イヒチャヤーと転訛してきたと考えられる。伊波城跡下東方に「角石原」と呼ばれる所がある。地元の人たちはこれをチヌヒンチャと呼び、石のシをヒと発音している。

石川は伊波城跡から嘉手苧、仲泊方面に続く丘陵地から流れ落ちてきた土石が川によって運ばれ、広がってできた石の多い土地であった。

以上のことから石川の語源はイヒチャヤーではなく「イシカワ」であり石の多い川あるいは石の多い所とストレートに解した方がよいのではないだろうか。

赤崎と七日浜

石川から金武方面へ石川橋を渡り終えると沖縄電力石川火力発電所が右手の海岸線寄りに立地している。この海岸一帯は赤崎と呼ばれている。

現在は埋め立て地となつて昔の形状を推察することは難しいが、ここは金武湾に突き出した岬でその先には、枝振りの見事な一本松があった。その姿を地元出身の伊波久一先生は

赤崎の小松 枝持ちの美らさ  
石川美童の 身持ちの美らさ  
と歌に残しておられる。

赤崎の地名は、石川岳から東山の丘陵地、そこから続く赤崎森の半島が周囲の海岸より高くなつていたのでアカは崖地、サキは先で「崖地の先」とい

う地名が付けられた。  
七日浜は、石川橋を渡り、赤崎から屋嘉に続く海浜である。はるか水平線に伊計、宮城、平安座などの島々が眺望できる絶景の地である。

現在そこには七日浜の碑が建ちその地名の由来について「尚徳王の一族が革命によつて国頭に逃げる途中人目を避けるために昼は山の中にひそみ、夜は海浜を歩いて七日かかったたのでこの名がついた」との旨が記されている。

他にその由来については乞食が屋嘉まで七日間もかかつて歩いたとの民話やまたこの海岸の砂は細かく、深すぎた歩きにくく二歩進んでは一歩さがるという「シンチャヤー(あとずさり)だつた」との話もある。ペリーの調査隊一行も石川川を徒歩で渡り、この七日浜を通るのに二時間も要したといわれている。

その由緒ある砂浜も護岸工事のため殆ど昔の姿はなく、ただ太古から変わることのない潮騒と浜風だけがわずかに残る砂浜に昔日の面影を語ってくれる。



▲現在の石川庁舎周辺の町並み風景